2021 年 4 月 25 日佐土原キリスト教会礼説教
聖書箇所：ヨハネ福音書 17 章 12～19 節
説 教 題：イエスの願い

3 年前に「信徒大会」にお出で下さった横山先生がこんなことを言っておられます。「祈りの形をとりながら、面と向かって言えないことを相手に投げつけることがある」。先生が食時の前、お子さん達と一緒に食前の祈りをされました。お子さん達への注文を並べ立てた祈りをされたそうです。最後に「アーメン」と言ったら、お子さん達は「アーア」とため息をつかれたそうです。先生は言っておられます。「その人の立場に立って、真にその人の必要のために祈るには、大きな愛と想像力がいる。そこに祈りの難しさがある」。この場合には、お子さん達に聞かせようとする気持ちが入っておられたかも知れませんが、誰かのことを執り成そうとすれば、聞かせようとしなくても、時には「あの方がこんな様に祝福されますように」という願いが、祈りの中に滲み出ることがあると思います。

お読み頂いた箇所は、続いて「最後の晩餐」におけるイエス様の祈りを記します。イエス様はもうすぐ天に帰られます。そこで地上に残る弟子達のために祈られます。弟子達のことを祈るその祈りの中には「イエス様は、弟子達がどのように祝福されることを願っておられるのか、弟子達がどのように歩いて行けるようにと願っておられるのか」、それが滲み出ているのです。その祈りを、弟子達は身近に聞く特権に与りました。そして私達に伝えてくれました。ですから、その祈りは「信仰者がどのような者であることを、主は願っておられるのか」、それを教えてくれることになります。この箇所から３つのことを学びます。

1：神に信頼する

イエス様は 12 節で「わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました」(12)と祈られました。弟子達は、イエス様に従うために、家も家族も安定した生活も捨ててついて来ました。イエス様に従うことが最も価値のある生き方だと思ったのです。しかし福音書は、弟子達が最後までイエス様のことを理解していなかったことを正直に語ります。お互いに足の引っ張り合いをしているような様子でした。しかし不思議なことに、旅から旅への放浪生活、指導者達からは付け狙われて危険がある、しかも枕するところも無いような惨めな３年間の生活で、彼らは脱落することも無く、とにかく最後までイエス様に付いて行くのです。失敗したり、間違ったり、イエス様に落胆されたり、仲違いをしたりしながら、それでも彼らは最後までイエス様に付いて行くのです。なぜ、彼らは脱落しなかったのでしょうか。その答えがここにあります。イエス様が彼らの信仰を守られたのです。彼らは十字架の時、イエス様を裏切ります。惨めな挫折の瞬間でした。でもどうして、全員がもう一度イエス様のところに帰ることが出来たのでしょうか。そして後には、皆が使徒として初代教会をリードするようになるのです。それも、イエス様が守られたからです。彼らの信仰の強さではないのです。

私達の信仰も同じではないでしょうか。私達は、自分の信仰で信仰生活をしていると思っているかも知れない。でも本当に私達は、自分の信仰だけで信仰生活を送って来られたのでしょうか。私達の信仰はそれほど強いでしょうか。そうではないと思います。私は、自分でも嫌になるくらい不信仰です。とっくの昔に信仰を捨てていても不思議ではありません。でも、なぜ、今でも信

仰者でいられるのでしょうか。それは、そんな者の信仰さえ、イエス様が守って来て下さったからです。それを思う時、本当に感謝します。神様の守りの御手に包まれているのだということを感じます。

さてしかし、ここでイエスが「滅びの子が滅びました」(12)と祈っておられるように、イスカリオテ・ユダだけは脱落しました。なぜ、彼がイエス様を売り渡したのか、それは分かりません。しかしここにヒントがあります。イエス様は「わたしは…あなた(の)…御名の中に彼らを保ち、守りました」(12)と言われました。それは「弟子達が、イエス様の教えた『神がどういう方であるか』という、その神様に信頼して、信頼に答えて下さる神様の守りを経験することが出来るようにした」ということです。つまり、どんなに分かっていなくても、弟子達はイエス様が教えた神様に信頼したのです。ユダは、神に信頼することが出来なかったのだと思います。だから、神に委ねるのではなくて、自分で何とかしようとしたのです。

イエス様はその伝道生涯の中で繰り返し「神に信頼しなさい」と言われました。「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願する先に、あなたがたに必要なものを知っておられる」(マタイ6:8)、それがイエス様の教えです。「神に信頼しなさい、そうすれば神が支えて下さる、助けて下さる」、それが聖書全体の教えでもあります。新約聖書には「彼(主)に信頼する者は、失望させられることがない」(ローマ9:33)と言う言葉が3回も出て来ます。神は、私達の信仰さえ守っておられるお方です。その方は、他のことも守られます。神の御手が自分を包んでいることに信頼して、その御手に委ねて行く、私達にもその姿勢が期待されているのではないでしょうか。

2：神の愛を土台として生きる

イエス様は14節で「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです」(14)と祈られます。なぜこの世の者でなくなったかというと、それは、イエス様が弟子達に神の言葉を与えられたからです。ここで「あなたのみことば」というは、恐らくイエス様の教えの総体でしょう。つまり「神はあなたを愛し、あなたのために独り子を十字架に架けて、あなたを滅びから救われて天国へ行く者として下さる。その神の愛を受けとったなら、あなたも神を信頼し、神と人を愛する生き方をしなさい」ということです。この言葉を受け取った人は「世の者でなくなる」と言われているのです。「世の者でなくなる」というのは「『世の基準を土台として生きる者』ではなくなり、『神が私を愛して下さっている、その神を信頼して生きて行こうという、神の愛、神への信仰を土台として生きる者』になる」ということです。「生きる土台」という線路が変わるから、同じ所を走っているように見えてもゴールが変わるのです。

ここでイエス様は、祈られます。「わたしは彼らにあなたのことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました」(14)。世が信仰者を憎むのは、神の愛、神への信仰を土台として生きる人々は、色々な面で世の人々と違って来るからだと思います。ローマ帝国に生きた初代教会は、皇帝を「神」として崇めさせようとする世の流れの中で、神でない皇帝を「神」とすることは出来ませんでした。そのために憎まれました。「違うから疎まれる」、いつの時代にもあることではないでしょうか。だからもう1つ祈られたのは「彼らをこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願いします」(15)ということです。

１番目に「神への信頼」という話をしましたが、キリスト者が神への信頼、神への信仰を土台として生きて行くのは、「この世」です。私達は「この世」に在って、神への信頼、神への信仰を土台として生きるように期待されているのです。しかし様々な困難がある。だから「悪い者から守ってくださるようにお願いします」と祈って下さったのです。

このことについて示唆を与えてくれるのは、信仰の父アブラハムです。「アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの樫の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに現れて言われた。『あなたの子孫にこの土地を与える』。アブラムは、彼に現れた主のためにそこに祭壇を築いた。アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った」(創世記 12:7～9)。アブラハムは色々な所へ移動しました。移動した所で生活するためには、生活環境を整えたり、周囲の人々と交渉したり、沢山のことをしなければならなかったのです。何から手をつけて良いか分からないくらいにしなければならないことがある。しかし、アブラハムはまず祭壇を築くのです。まず神に向かったのです。神の愛、恵み、その神への信仰を、生きる土台としたのです。その結果、確かに彼の生活は厳しいものでした。神を知らないカナンの人々と共に生きながら、時には交渉しながら、特には戦いながら、そうやって生きて行ったのです。しかしその厳しさの中で、アブラハムは神の祝福を経験して行くのです。神が守って行かれるのです。

繰り返しますが、私達は「この世」に在って、神の愛を、その神への信仰を土台として生きて行くのです。そこには、困難があるかも知れません。また「もう少しこうなれば、ああなれば…」ということに満ちているかも知れません。しかし私達は、神の計画によって今の場所、今の状況に置かれています。そこが、私達が神の愛を、神への信仰を土台として生きる場所なのです。イエス様が祈って下さっています。神を信頼し、神への信仰を大切にして生きて行く、その生き方の中で、私達もアブラハムのように神の祝福を経験して行くのです。

3：神の業に参与する

イエス様は 17 節で「真理によって彼らを聖め別ってください」(17)と祈られます。「聖め別つ」とは、神のために他から取り分けるということです。ですからイエス様は「弟子達を、神の御用のために世から取り分けて下さい」と祈っておられるのです。「神の御用のために取り分けられる」とは、どういうことでしょうか。ここでイエス様は「わたしは、彼らのため、私自身を聖め別ちます」(19)と祈られます。それは「私は、彼らのために、神の御用のため、神のご計画に従い、十字架に架かります」ということです。それが「彼ら自身(弟子達)も真理によって聖め別たれるためです」(19)というのは、「弟子達が『私はイエス様に死んで頂いた者だ、イエス様の十字架によって神の御手の中に入れて頂いた者だ』と感謝しながら、神の御用をする」ということが期待されているということです。

「神の御用をする」とは、「神の仕事は何だ、何だ」と探し回ることではありません。イエス様は「真理によって神の御用をするようにして下さい」と祈られました。そして「あなたのみことばは真理です」(17)と祈られました。「真理」とは「神の言葉」と置き換えられます。つまり私達は、何か特別なことをするのではなくて、神の言葉を聞いて、信頼して、そこに生きること

によって、神の御用をする者とされて行くのです。ある人は「キリスト者とは御言葉に仕える者だ」と言いました。神の言葉を聞いて、信頼して、そこに生きること、そのことが、神の御用をすることなのです。

先日からレーナ・マリアさんの話をしていますが、彼女の代表的な歌に「いちわの雀に」という歌があります「こころくじけて 思い悩み、などてさみしく 空をあおぐ。主イエスこそわが まことの友。いちわのすずめに 目をそそぎたもう、主はわれさえも ささえたもうなり。声たからかに われはうたわん、いちわのすずめさえ 主はまもりたもう」。この歌はシビラ・マーティンという女性が作詞をしたのですが、1905 年、彼女はある場所でドゥーリトゥルという名前の夫妻と知り合いになりました。妻は、20 年以上寝たきり、夫は足が悪く、車いすの生活をしていました。でもその夫妻が、喜びに溢れ、周りの人々に慰めと励ましを与えていたのだそうです。しばらく共に過ごし、夫妻の様子を見ていたシビラ・マーティンは、ある時、思い切って夫妻に聞いたそうです。どうしてあなた方はそんなに望みに満ちて暮らしているのですか。夫妻から返って来た答えはごくシンプルでした。「一羽の雀にさえ目を注がれる主は、私達にも目を注いで下さっていることを知っているからです」。イエス様は言われました。「五羽の雀は二アサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません」(ルカ 12:6)。ドゥーリトゥル夫妻は、その言葉を本気で受け取り、そこに生きていたのです。その言葉に衝撃を受けてシビラ・マーティンが書いた詩が「いちわの雀に」という讃美になって、今も歌い継がれているのです。私達も、どんなに貧しい形でも良い、神の言葉を聞いて、信頼して、そこに生きる、そのようにして、神の御用をする者でありたいと願います。

4：終わりに

神に信頼する、神の愛を、神への信仰を土台にして生きる、神の言葉に仕える(生きる)、イエス様は、私達にも期待し、私達のためにも祈っていて下さっています。イエス様の祈りに守られていることを覚えつつ、信仰の歩みを進めて行きたいと思います。